THE MITSUKE SHINBUN

【3】 令和３年１２月９日（毎週木曜日発行）（週刊）

バングラディッシュを知ろう

新潟小５年生が異文化体験

ＳＤＧｓ学習の一環として新潟小５年生18名が３日、バングラディッシュの文化について学んだ。

講師は、同国出身で市内在住のモハメッド・ヌルル・エラヒさんと美砂子夫人、新潟県国際理解教育研究会佐藤義朗会長。

貧困で教育が受けられない母国の子どもたちのために学校を設立し、維持運営のための仕組みも作ったことで２０１９年に長岡市から米百俵賞が贈られているエラヒさん。

教室では、日本より多い１億６千万人の人口やイスラム教の正しい説明、箸ではなく手食文化であることなどが紹介された他、識字率55％であることに触れ、家庭の事情で学校に行けない子どもたちがいる現実も伝えた。

異文化体験では、エラヒさんがスパイスを利かせて手作りした本場のチキンカレーをインディカ米で試食したり、同国の伝統衣装サリーも試着。

男子に女性用のサリーを、女子にお祈りをする際の男性の正装を着せると「着心地がいい。素材が綺麗」といった声が聞かれ、講師の３人から「女性は基本的に髪や素足を見せてはいけない。でも、お腹は見せてもいい場合がある」ことや「豚肉は絶対に食べない」ことなど文化の違いを説明。その後、「違いはあれど同じ人間。互いに理解を深め、仲良く愛を持って交流しましょう」と呼びかけた。

同校の梅田侑澄さんは「一日５回もお祈りすることや休日が金・土曜日なことなど、異文化のことをたくさん学べてよかったです」と話した。